

の血腫とは異なる淡い density をしめす血腫が増大していた。頭部 CT で、液状成分が疑われる例では、亜急性期の血腫増大に注意すべきであると考えられた。

9 半年間に8回の皮質下出血を来した30歳男性の1例

青木 悟・岡田 正康・森田幸太郎
小澤 常德・本道 洋昭

富山県立中央病院脳神経外科

若年で脳皮質下出血を繰り返した脳アミロイド血管症の1例を経験したので報告する。

患者は30歳、男性。出生後3カ月で growing skull fracture となり、1980年に手術を受けた既往がある。

2010年、突然の頭痛を主訴に救急搬送された。頭部 CT では右後頭葉に斑状の皮質下出血あり入院した。頭部 MRI、脳血管撮影では出血の原因となる異常所見は指摘できなかった。入院3日目に意識障害が進行し、頭部 CT で血腫の増大あり手術を行った。術直後に急激な意識障害の進行あり、頭部 CT で再出血を認め、再手術を行った。その後、最初の出血から1カ月後に右前頭葉に皮質下出血、4カ月後にも右前頭葉に皮質下出血あり、5カ月後～6カ月後の間にさらに2回の前頭葉皮質下出血、1回の右側頭葉の硬膜下血腫を伴う皮質下出血、最後には左前頭葉皮質下出血を起こし、その後は意識障害が遷延している。

血腫除去時に採取した組織標本から、脳皮質の細小動脈の中膜を中心にコングレッド染色で染まるアミロイドの沈着を認め、脳アミロイド血管症と診断した。

通常臨床で遭遇する脳アミロイド血管症は、高齢発症が特徴の一つである。若年で発症するアミロイド血管症では、遺伝性アミロイド性脳出血に見られる遺伝子異常や、プリオン前駆蛋白としてできるアミロイドによるアミロイド血管症などが報告されている。本症例ではプリオン蛋白は陰性であることが判明し、現在は遺伝子検査を進めているところである。

10 3T-MRI による24時間態勢事始

柿沼 健一・渡辺 秀明・梨本 岳雄
菊池 文平・佐藤 洋輔

新潟労災病院脳神経外科

2000年、急性期脳卒中の診断に対して当時全国的にも珍しかったMRIの24時間態勢を敷いた当院からは、少なからぬ情報を発信できたと考えているが、今回この態勢が新規3T-MRIによって2009年12月から行われるようになったので、これまで得られた3T-MRIの画像を供覧し、今後の展開の可能性を考察した。主な内容は、1) 主幹動脈閉塞症における非造影のPWI、2) 拡散係数を2000として描出し得た脳幹の微小梗塞、3) 血管系では1～2mmの動脈瘤、眼動脈、およびM1からの穿通枝の描出、4) 被殻出血術前術後における錐体路の変化を示唆するtractography等である。

11 髄膜癌腫症における頭痛・嘔吐と髄液所見について

高橋 英明・吉田 誠一

県立がんセンター新潟病院脳神経外科

【目的】髄膜癌腫症に対して症状緩和を目的に稀数回少量髄注化学療法を行ない、その髄液所見の変化を検討した。

【方法】髄注化療を行った癌性髄膜炎症例45例を対象とした。男性16例、女性29例で、年齢は30～86歳、平均57.6歳であった。原発巣は乳癌21例、肺癌16例、他8例である。脊髄病巣のあるものをSpinal (Sp) type、無いものをIntracranial (Ic) typeとした。治療は全脳照射+腰椎穿刺によるMTX 15mg, AraC 15mg, Predonine 20mg 髄腔内投与3回で28例、髄注のみの症例は17例であった。

【結果】Ic typeは27例、Sp typeは18例であった。頭痛は31例69%に認め、嘔気、食欲不振は36例80%に認めた。Ic typeでは、髄液細胞数は120.9が79.3, 38.3, 39.3, 蛋白は157.7, 146.4, 147.1, 121.0と低下した。Sp typeでは更に顕著で、細胞数は180.5, 169.9, 132.9, 60.4, 蛋白は810.6,